

日本プロレタリア文学集・5



ロレタリア文学集・5

期プロレタリア文学集 5

日本プロレタリア文学集・5

初期プロレタリア文学集 Ⅲ

定価 二六〇〇円

一九八五年十月三十日 初版 ©

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒150 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一一
振替 東京 三一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の
権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・5

初期プロレタリア文学集 (五)

目次

今野賢三

火事の夜まで……………二

汽笛……………三

おれは行く……………三〇

坂……………三三

彼れ……………四七

山川 亮

決闘……………五九

泥棒亀の話……………七二

小さな町の出来事…………… 九〇

影 像…………… 一〇五

馬盗人…………… 一二七

山田 清三郎

幽霊読者…………… 一三三

特種事件と支社長…………… 一四三

若き時代…………… 一五〇

前田河広一郎

三等船客…………… 一五九

脱船以後…………… 一六五

麵 麴…………… 一七三

犬…………… 一七四

脅 威…………… 一七九

最後に笑う者 三〇一

井 東 憲

監獄の庭 三三五

軍国主義と雷 三六一

岡 下 一 郎

齒 車 三六七

練炭にかぶれる 三七八

組 合 旗 三八九

神 近 市 子

雄阿寒おろし 四〇五

千 葉 武 郎

兵營の背教者 四一九

中野 正人

紛 擾 四三二

辻本 浩太郎

カレンダー・ロール 四四七

広瀬川 浩二

淋びれゆく漁村 四五五

島田 美彦

兵と兵 四六五

北村 小松

一等症 四六九

解 説	……………	祖父江 昭二	四九
発表年月日と掲載文献	……………		五〇三

今野賢三

火事の夜まで

一しきり吹雪がバツと二人を包んだ。

——涙ぐみながら、心から微笑んでいるちよ子の顔が
おれの眼の前にある。

齒をガタガタさせながらだをすばめて、ひしとより
添うて、顔を見合せて立止った二人をまた、バツと吹雪が
襲うた。

警察から此処迄来る（五六町の間）ちよ子が、疲れ切っ
ていながらも、うわごとでも言うように、のべつにしゃべ
ったことを書く前に、ちよ子とおれとの仲を一寸ことわっ
ておかねばならぬ。

おれは新聞配達夫なのだ。

〇〇新聞の拡張のために東北の此の小さな町に来ている。

拡張に駆けまわっている間に、ふと、ちよ子の家を知つた。家と言ったところが名ばかりで、馬小屋よりちつとばかり体裁がいいのだ。正直に書く。それは晩秋の或る一日である。ちよ子が世間に内密で、淫売をやっていることを知って……。

が、ちよ子の身の上を知ってからのおれは、遊ぼう——という気持どころの話ではなくなった。

ちよ子の母はある寺に飯焚きとなっていた。弟は、ある商店に奉公にやっていたのだが、どうやら肺病になつてい
るらしいのを、すぐに引取つて療養も出来ず、その商店に
秘してそのままにしてあるというのであった。

おれはついに夫婦の約束をした。それは此の冬を迎えて
からだ。軽率だ、と笑うものは笑うがいい。どんな困難も
引受けるだけの、誰もが前にもなんの恥るところもない、
立派な決心をしたのだから……。

それから暫く後の或る日——。

おれはその馬小屋のような家でも、新婚のよろこびをた
たえて、仲間と共にほんの形ばかりの式をあげた。そして
みんな安酒でたわいなく酔払った。夜遅くまで騒ぎちらし

た。隣り近所へはなにも知らせないから、そのらんちき騒ぎも、ただ、『あんな女のところへ来て酔払うなんて……』と盾をひそめさせたことだろうと思う……。その夜――。

その夜を！ おれはどうして忘れられるか！ なるほど、ちよ子は淫売として警察から睨まれていたことをおれは知らないこともなかった。

が、なにごとだ。

仲間の帰ったあとで、おれたち二人の寝入りばなを、警察に踏み込まれた。

ちよ子の挙動がいけなかった。あわてて逃げようとしたのだ。それはわかっている。ちよ子は単純な考えより出来ない女だ。あまりの不意打ちに面喰つてあわてたまでに過ぎないのだ。おれにはその場でそうハッキリわかった。ところが同じ人間でありながら、警官には、やましいところがあるから逃げようとした、ずるいもの――と見えたのだ。

そしてちよ子は、その場から、あの寒い夜を、ブルブル震えながら警察に引立てられたのだ、おれの弁解なんて、てんでとりあげられなかった。おれは警察までくっついて行つて、喧嘩口調になつて、署長にまで面会を求めたが誰一人とりあつてくれなかった。顔を蒼くして、あわれみを求めるようにふりかえつてじいっとおれを見詰めたちよ子

の眼をあたまにのこして、世間がすっかり寝しずまった夜中を、しょんぼりと警察を出たおれの心持は!!

翌日、ちよ子が一週間の拘留を言いわたされたことを知ったものの、その不法に對して戦うだけの、ちからのない自分に腹を立てるだけだった。それでもおれは、ちよ子を一刻も早く警察から出してやりたい一心に、ただ一人で、もがきあせつた。しまいに、仲間を駆けまわつて訴えた。が、仲間は『金があつたらなんとかなるだろう！』と言うだけにすぎなかった。泣き寝入りになつて了うことはたまらないことだった。と言つて、やつぱり、泣き寝入りになるより仕方がなかった。おれの心は熱した。呪わしさに熱した。

屋は家のなかでもがいてばかりいた。

配達に出ると、新聞のとつていない家にまでぼんやり、投げ込んで歩いて、あとで気がついてその新聞をとるもどしたりした。朝日のゆくところへ、報知を投げ込むなどのへマが、幾度もくりかえされた。

夜は――他人とすれ違ふと、なんとなく後ろぐらい気持ちになつたりしながら、野良犬のように警察のまわりをうろ

ついた。

此処が監房かな？　と思われるあたりをそれとなく眺めて、口笛を鳴らして見たりした。

そして待ち遠しい一週間は過ぎた……。

——吹雪の晴れ間に、ちよ子は油気のないほつれた髪を掻きあげる。顔はまったくやつれた。それだけでなくとも痩せているのに……。

おれを見詰めているうちに、その眼はますます潤んで来るように見える。それでも、口元の微笑だけは崩さない。

……ハアハア息を切りながら、ちよ子のしゃべったのはこうである。

「警察に行きさえすれば、すぐに尋問がはじまって、あかりがたつて、あの巡查を、それ見ろ！」と見かえてやる事が出来ると、ほら……途中から、そう思うようになって……警察の門に入る頃はあたしの心もよっぽどおちついて……のさ……。安々とすぐに帰れるものとはばかり思っちゃったの。そうなんだよ、ねえ。心ではちっとも悪いことはないんだから……。

すると、すぐにあたしをしらべるところか、おどかさうにして、留置所へだまって入れっこまったのさ。

それから一時間以上も、じりじりと待ったけれど、誰一人呼び出しに来ないじゃないか！　あたし、最う……情けなくなっちゃってね。廊下の高い天井に、薄暗い電燈がたった一ツぶら下っているばかりなんだろう……。そして、外から、ビーンと戸が閉められてあるんだからね。

それでも、はじめ、留置所へ入れられる時は自分ながら感心するくらい、気強くなっていたのさ。まったく、おかしいくらい平気だったの……。

だけど……しまいに、やりきれなくなっちゃった。

コト、コトという靴の音を聴いているとたまらなくなつてねえ……。あんた！

やつと、部長さんか、誰かが近づいて来たんだな——と、思つて、ほっとして身体をシャンとして顔をあげると、なんのこった。便所へ反れて行った靴音だったの。

それは、生れてはじめて、泣くにも泣かれない心持であったのさ……。

夜明けが近くなつた時、腋下から冷々と寒さが沁み込むんだものねえ。

あたし、ぶる、ッぶるッ震えて、そうしているうちに、ね

え、どうしても這い上ることの出来ないような、暗い穴の中へでも、ほうり込まれているような気がしちゃったの。

ねえ、どうなるんだらう？　と思うと、心配でたまらなくなっちゃったのさ。

……そして……しまいには、あたし、泣いた！

だけど、あたし、それア新米の巡査だからなにもわからないんだらう。夜が明けるときつと、署長さんがしらべてくれる、そうするとわけなくゆるされる……馬鹿だったねえ。あたし、そう思って、自分をなだめたものさ。

……ところが、署長さんは、まるきり駄目だったの。ほんとに腹が立つてならない……。

口髭をひねりながら、あの助平、たらしい眼で、あたしをじろじろ見てさ。

あんまり威張るものじゃないよ——と、怒鳴ってやりたかったの。ほんとに癪にさわる面つたらなかった。

それでも、あたしは、あの新米さんが間違いだらうから、すぐ帰ってもかまいませんか、と、おとなしく言っちゃった。その実、それア、まったく、すぐに帰れるものとばかり思っていたのさ。だから、まア、あたしもあたしよ。すぐ立って出ようとすると、いきなり、あの、いけ好かない署長が、ぐっと睨みつけて、誰が帰れと言ったと、怒鳴

ったのさ。あたし、びっくりしちゃった。

その時、署長もやつぱり、あの巡査と同じ仲間だと思つたら、最うおさえようとしても涙が出て、……そして、あたしのがれっけないと思つちゃったの……。

『おまえにやましいところがなければ、逃げる必要がないじゃないか。どんなに偽を言つても、金を取つて、あの男を客にしたことはわかつている』こう言つてあたしを責めたのさ。あたしが、幾ら夫婦になったのだと言っても、

『なにをごまかすかッ！』とおどかしつけて、そしてとうとう一週間の拘留にしちゃった、あたし、口惜しくて口惜しくて、ほんとうに！　あたしたちは、同じ人間でありながら結婚することも出来ないのかと思つたらね。あたし、どんなに情けなかったか知れない。

あたりまえに、夫婦になったから寝たというだけなのに、なぜ悪いのか、あたしには、どうしてもわからない。あんたわかる？　悪いことか知ら？　ねえ、どこが悪いの？　どうして悪いの？……それも、みんな貧乏だからだ——と、あたし思ったの。

だけど、あたし、憎たらしかった。あの署長も、あの巡査も、みんな……。

……ねえ、そして、あたし、署長に泣いて喰つてかかっ